

# 受動喫煙と肺がん患者

## ——彼ら彼女らはいかなる影響を被っているか——

立教大学大学院 齋藤公子

### 1. 目的

肺がんは予後が厳しく、国立がん研究センターによれば2018年のがん死亡予測数37万9,900人のうち、肺がんによるものが1位で7万7,500人である。その一要因として挙げられるのが喫煙で、受動喫煙との関連を扱った研究によれば日本では年間1万5,000人が受動喫煙により死亡し、そのうちの2,480人が肺がんによるものと推計される(片野田ほか2016)。

2018年に衆参両院の厚生労働委員会で、受動喫煙対策推進を企図した法改正が議事に上った。参考人として招致された肺がん患者Aさんは「受動喫煙でどのような苦しみを経験するのか、当事者として具体的にそれをお伝えする」との趣旨を述べて発言した。だが臨席の国会議員がAさんに野次を浴びせたことで、この件に関する報道の多くは議員による野次の問題を扱った。

本報告は、その際Aさんが表明しながらも大きく取り上げられなかった「苦しみ」の経験がどんなものであるかを、肺がん患者たちの声から示す。それにより、肺がん患者たちが受動喫煙によっていかなる影響を被っているかを明らかにする。

### 2. 方法

Aさんは日本の肺がん患者会の連合組織であるJ会と、東京・神奈川を拠点とする肺がん患者会グループOの理事長を務める。報告者は2016年よりこれらの団体の活動に参加し、フィールドワークを行ってきた。本報告はそこで得られた参加者たちの発信や彼ら彼女らへのインタビューの結果を、肺がん患者たちの声として用いる。

### 3. 結果

肺がん患者は受動喫煙にさらされることで、がんが「再発・悪化するのではないか」との恐怖感を抱くことがあった。また肺がん患者は、身近な人が受動喫煙の被害を怖れる患者を慮って自分の眼前で煙草を吸わなくなったにもかかわらず、喫煙自体はやめないことに対して「悲しい」「悔しい」と感じていた。

家族や職場の同僚により受動喫煙にさらされた経験がある肺がん患者は、それらの人との間に〈加害—被害〉関係が存在する可能性を認識することで心理的苦痛を経験した。またその身近な〈加害—被害〉関係を指摘することに対する躊躇が受動喫煙による被害の表明を抑制し、対策の推進を妨げる可能性を認識することによって経験される苦痛も示された。

### 4. 結論

肺がん患者が経験する心理的苦痛については「肺がんのスティグマ」についての研究(Chapple, et al. 2004)が知られる。それによれば肺がん患者たちは喫煙経験があろうとなかろうと他者との関係において喫煙にまつわるスティグマを経験し、心理的苦痛を被る。その事象が前提とするのは患者本人の能動喫煙であった。かたや本報告は、受動喫煙が肺がん患者に及ぼす影響は身近な他者との間に生じる心理的苦痛として経験されることを指摘する。それは能動喫煙が生起する「肺がんのスティグマ」によって経験される心理的苦痛とは別様のものである。肺がん患者たちが経験する心理的苦痛は、受動喫煙により被る影響という視点からの検討によって理解の精緻化が進む。同時にその作業は、受動喫煙被害一般の理解と対策の推進をも促すであろう。

#### 【文献】

Chapple A., et al. 2004, "Stigma, Shame, and Blame Experienced by Patients with Lung Cancer: Qualitative Study," *BMJ*, 328: 1470-5. 片野田耕太ほか, 2016, 「受動喫煙と肺がんについての包括的評価および受動喫煙起因死亡数の推計」厚生労働科学研究 平成27年度報告書.